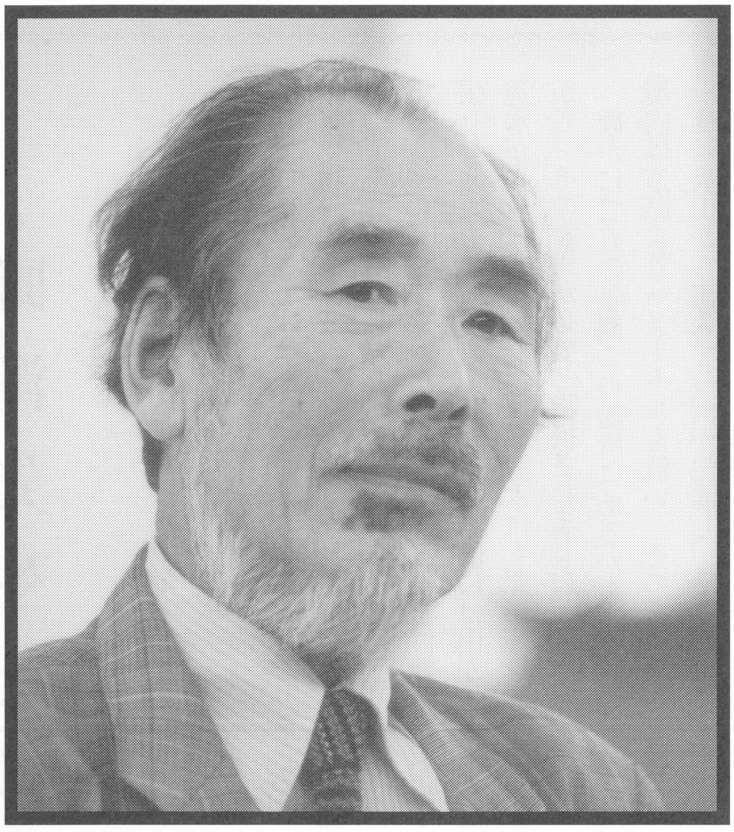


妙の光

通刊76号 **復刊55号**
2006年9月22日（季刊）
角田山妙光寺 発行
新潟市角田浜1056
〒953-0011
TEL 0256−77−2025

追悼 野澤清先生

―吹き上げ御所造園設計 野澤清さん死去 七十三歳―

天皇、皇后両陛下が住まわれている吹上新御所の造園設計を手がけるなど、造園界の第一人者として活躍した、造園家の野澤清（のざわ・きよし）さんが八月十八日に心不全のために死去していたことが分かった。七十三歳。葬儀・告別式は九月十日午後二時、川崎市麻生区片平、善正寺で行われる。喪主は妻・渓子（けいこ）さん。

一九五八年東京農業大学造園学科卒業。七一年に野澤鈴木造園設計事務所所長。九三年に吹上新御所の庭園設計、管理を担当した。他の代表作に東京・世田谷美術館、明治学院大学、関東学院大学キャンパスなど。」（八月二十六日付『フジサンケイ ビジネスアイ』誌より）

野澤先生と妙光寺

小川英爾

以前の妙光寺

妙光寺は昭和五十六年に建替えた客殿が、おりからの好景気で物価も借り入れ金利も高くなって費用が不足し、無理に工事費を削減したため数年後に床下の換気不足が原因で床板が腐ってしまった。防湿対策工事を再度行い床板を張り替えたものの、専門家から根本的には山からの地下浸透水が異常に多く、建物にも樹木にも悪影響を与えているから、その対策が必要と指摘されました。

確かに二五〇年間この場所にあるから周囲が高くなり、境内は道路より一メートルも低い。そのため平均で四年に一度は裏山から流入する沢が氾濫し、そのたびに床下、あるいは床上浸水するのが先代住職の時代からの悩みだった。日常的にも境内は常に湿気でジメジメし、乾くことがあると玄関前まで入る自動車が埃をたて、廊下がすぐに白く汚れた。

解決するには全体の排水をなんとかして、同時に駐車場を離して気持ち良く歩いてこれる境内に作り変えるしかない。これまでも世話人で巻の小林與志英さん、内藤八十一さん（故人）、また升潟の高橋強さん（故人）らが、竹やぶを刈って沢を掘り下げたり、ヒューム管を運び入れて水の流れをスムーズにしたりと熱心に作業奉仕を続けてくれた。でももう根本的にやらないと事態に追いつかない。しかしきちんとした計画と大きな資金が要るが、全くその当てが無かった。



水害のようす

先生との出会い

建築工事と違い計画だけでもできていれば、作業は皆さんから手伝っていただいて少しずつやっていけばいい。とにかく完成ははるか先だが、全体計画だけでも相談できる造園設計の専門家を探そうと考えた。紆余曲折の末、私の恩師のルートで東京三軒茶屋にある先生の事務所をお訪ねした。経緯をお話しし「お金が無いので工事完成の目処も

ないし、設計料は新潟の美味しいお酒と檀徒の方が作ったコシヒカリ。お時間が取れたら妙光寺に来て、これを召し上がっていただいて相談に乗っていただきたい。」今思うと、初対面なのになんとも無茶な私の申し出に、ニコニコしながら「面白そうだ、行きましょう」と言っていただいた。あのときの光景は忘れられない。二十数年前だからお互い若かった。

手始めに

おいでになって早速、客殿工事の際に取り急ぎ作った中庭をご覧になり「少し手直ししましょう」と、石の角度をチョッと変えただけで雰囲気が随分違ったのには驚いた。「それにしても広い境内だから、現状の図面が必要です」と言われたが、業者に頼む金がない。そこで私が妻を相棒に平板測量で平面図を作り、レベル（測量器）で測って高さを記入して作った。この作業だけでも一年はかかり、同時進行で、境内を流れる宮沢の改修工事を行政に陳情を続けた。この宮沢改修が本当に大変で、これまた実に多くの方々から陰に陽に応援してもらい、数年後に県が三年がかりの工事を決定したのだった。その経過はあまりに大変でとてもここでは書き切れない。

池庭作り

現在、山門前に池があるが、以前は「権兵衛池」といってこの二倍以上ある大きな池だった。ここに生える葦を毎年刈っては、本堂と客殿のかやぶき屋根を葺く材料にしていた。しかしその必要も無くなり、半分以上が他人の土地だったこともあって地権者の都合で、埋め立ててしまった。実はそこが遊水池の役割をはたしていたのだから、再度池を掘ろうと先生と相談が決まった。

しかし資金はゼロ。ところがこれまた幸いなことに大勢の力が集まった。先生の図面をもとに親しい土建会社が格安で敷地を造成し、残土を福田石材には土留め用の石を大量にいただいた。工事は私の友人の伊藤さんが、技術協力でネパールから戻りとりあえずの行き場所がなく妙光寺に滞在して重機を動かし、その重機は私と妻が知り合う縁を作った重機リース会社社長の広川さんが、ただ同然の金額で数年間貸してくれた。そして巻の石田大吉さん（故人）が毎日通って作業奉仕。さらには野澤先生を慕う長岡の造園会社が、「先生に学べ」と若い職人を派遣してくれた。そのうち五カ浜の遠藤祐広さんが「敷地が狭いようだから」と、隣地の一部を買って寄付してくださる。地形ができるころに、檀徒の家で大きくなりすぎて不要になった庭木をいただいて植栽。それにしても、資金が無くなり工事はたびたび中断。

そこに「私の母は妙光寺の檀徒の家で生まれ、幼いころお寺によく連れて行かれたことが懐かしい。私が寄付する

からあの庭を完成させてください。私も農大造園科出身で野澤君は僕の後輩だから、彼に最後まで面倒みてもらってください」と言って、数百万円とさらに苗木をトラック四台分も提供してくださったのが、新潟市の遠藤茂五郎さん（故人）だった。その他も沢山の物心両面の協力があった。野澤先生は図面を書き、現場で私を含めた素人ばかりの作業員と一緒になって、池庭つくりに汗をかいてくださった。

宮沢改修

この間県による宮沢改修工事が決まり「できるだけ川底を下げる、護岸は石積み、できれば川底は自然のままに」という私の要望に、「限られた予算でやるのに勝手なことを言う」と県の担当者は激怒。長時間にわたる話し合いで「住職の言い分は分かりました。川底はコンクリート張りにせざるを得ないが、他は要望に沿います。池を作っているようですから、沢の上流で取水して池に滝で入れられるよう配慮します。私も自然は好きですから」とまで言ってくれた。

ところが数年後工事の最終年度になって交代した担当者は「妙光寺さんのための工事ではなく、山の水をスムーズに海まで流す工事ですから、境内は低すぎて排水を受け入れられません」と言って来た。驚いた私は改めて現場で協議する日時を約束させ、その場に全檀徒役員を招集、野澤先生にも同席いただいた。担当者の説明に先生が「あんたの説明は矛盾している。そのままなら水路が空中に浮く計算だ」と猛然と抗議され、日ごろの温厚なお姿から想像できない事態になった。担当者も興奮して「県の測量にケチをつける気か。どういう立場での発言だ」とお互い今にも掴み掛からんという勢いでいる。

困った私が「ここでレベル（測量器）で見ればどっちが正しいかわかることでしょ。今持ってくるから待ってください」と間に入った。「そんな機械がどうしてお寺にあるんだ」と担当者。「それほど水に悩まされて来たということだ」と野澤先生。やがて設置したレベルを双方で見て白黒がついた。なんと県に八〇センチもの測量誤差があったのだ。「おかしい、こんなはずは・・・。ま、今後も工事に関してご要望がありましたら、いつでも仰ってください」と県職員は引き上げた。

安穏廟計画

大きな排水路の目処がたち、基準となる高さがでたことで、境内全体の支流といえる細部の排水路計画が可能になった。しかし相変わらず資金はなく、手がつけられない。庭と違って見栄えのしない排水路に寄付の申し出がないのは当然だ。

そのころ畑として貸していた土地が、採算がとれないからと農家から返還された。放置すれば雑草が生えて管理が大変になる。その他さまざまな背景から役員と相談の上、

いまの「安穏廟」を考え出し、先生に相談するべく事務所をお訪ねした。そのとき「小川さん、よく思いついてくれました。私も考えたことがあって、いつか実現したいと思ってました」と、事務所のいつも通り雑然とした図面の山の中から、一枚の絵を取り出されたのだった。それがいまの安穏廟。それから話はとんとん拍子。でも「先生、借金してやる仕事ですから設計料が払えるかどうか」との私の言葉に、「大丈夫、私も子供がいないから将来はここに入れていただくために、一区画いただければいい」と先生。「先生、骨を埋める覚悟とはこのことですね」と冗談で返すのがやっとの、ありがたいお言葉だった。

それからというもの、保健所の許可を得るのに一年以上を要し、銀行からの借り入れ、使用契約や規則の作成、工事の段取り、対外的な告知方等々文字通り東奔西走、苦労の連続だった。とくに石を安く輸入できないか、友人を頼って韓国まで先生と渡り、紹介されて二番目に大きいと言われる石材会社まで交渉に行った旅は今となっては懐かしい思い出になった。

見通しがつき、名前を二人で相談。最初お経からいただいて安穏墓（あんのんぼ）と私がいうと「あんのんばか、とよまれてしまうから『安穏廟』にしよう」と先生。決まるまで丸二日かかったと記憶している。以来、全国に六百とも七百とも言われる永代供養墓ができ、そのいくつかにこの形は盗用され、そのかなりの所が「〇〇廟」と名乗っている。この話がでると先生は嬉しそうに笑っておられた。

こうして安穏廟を機に人が集まり、その収益の一部や寄付で排水路工事を少しづつ進めて来た。

セミナー開催と各地の動き

時代の要求と合致したことでその後の「安穏廟」の動きはご存知の通り。参考にしたいという寺や自治体のあまりの声の多さに、東京の出版社に依頼して永代供養墓セミナーと称する講習会まで開き、先生に講演いただいたこともあった。また具体的に先生にお仕事として、各地のお寺に出向いていただく機会もそれ以降ずっと続き、急逝されたことで設計や工事が途中になってしまった所もいくつかある。でも近年「僕の賞味期限は長くないからね」と口癖のように仰っておられたので、今となっては了解していただくほかない。

「杜の安穏」

予想外に早く「安穏廟」が満杯になり、受付を止めた。しかし希望者が続いて断りきれず、先生と相談の上で増設を決めたのが『杜の安穏』だ。先生曰く「安穏廟は最初に四基を想定して設計したのだから、五基目、六基目は止めよう。」私「そうですよね。周囲の松林が枯れているので、緑を増やしその中に佇む可愛いらしい形がいいです。」「そうだそれで行こう。名称は杜の安穏だ。杜は鎮守の杜とも

いって、神様が住む森だからね」と先生。

しかし、当時病気がちで弱っておられたせいか基本的な設計はできたものの、細かいところを何度打ち合わせしても先に進まなくなってしまった。工事にかかる期日の制約もあり、私は仕方なく細部を決める実施設計を、妙光寺の一連の設計を担当してきた建築家の中沢敏彰さんに依頼した。お二人は本堂工事等々で何度かお会いしているので、中沢さんが先生の思いを引き継いで設計され完成に至った。よって「杜の安穏」は野澤清基本設計、中沢敏彰実施設計としているが、先生にも気に入っていただいた。

三重塔修景

この間に本堂建替え工事があったが、建築費用がやっとで造園工事までは手が及ばなかった。それでも先生には境内の将来図を含めた本堂の完成予想図を描いていただいた。ところが庭の完成予想図を描くのは先生のお得意だったが、これも詳細部分はお弟子で若い重富さんが担当し、その重富さんがまもなく交通事故で急逝されたのは、先生にとって大きな痛手だった。



平成十五年の春早々、境内に建つ三重塔が突風で大きく壊れた。築二百年前後と推定され、文化財級の代物だけに困ってしまった。そのとき東京の小黒トメさんから修復費用寄付のお話をいただき、文字通り仏様のお守りを実感させていただいた。この工事は私と三十年近い交際のある文化財建築の専門家の山崎完一さんに監修と管理を願いした。この山崎さんは岩手県のある旧家の修復工事で野澤先生とご一緒され、また島根県の旧家の保存活用事業の理事をお勤めで、それは妙光寺客殿を設計した茶谷正洋東工大名誉教授（先述の中沢さんの先生）の奥様の生家という宿縁浅からぬ関係があった。

以前から野澤先生は「いつか三重塔は回りに池を作って、水面に映る姿が見られるようにしたい」と言っておられ、それが実現するときがはからずもやってきた。でも若いスタッフもいないなかでスピーディーに図面が描けないと、工事が進まない。そこで、元お弟子で訳があって野澤先生と疎遠になってしまった松本恵樹さんと、よりを戻して一緒にやって欲しいと私からお願いした。幸い双方とも「小川住職が間に入ってくれるなら・・・」と同意され、十数年ぶりに関係が修復された。その結果、先生の計画を松本さんがコンピューターで図面にして、工事中は先生を慕う二十台、三十台、四十台の若い造園家が、妙光寺に集まって手助けするなど、先生も本当に嬉しそうに教えている光景が見られた。

この松本さんさら若い人たちが、このたび京都で倒れた

先生を救急車で病院に運び、最期を看取ることになったことも、縁と言うほか無い。また三重塔の完成の式典での嬉しそうなお写真が遺影に使われ、その際の「鼓童」の音楽がとてもよかったと後日語られたそうで、一般焼香のおりにこの曲を流したことも、最後まで妙光寺とのご縁の深さを痛感している。

最期と葬儀

暑さ厳しい八月十八日の京都。研究熱心な全国の造園業者で作る「造園アカデミー会議」の大会で代表として講演され、帰路に市内の電車内で倒れ、午後八時二十二分虚血性心不全で帰らぬ人となられた。七十三歳。

ご自宅のある東京へのご遺体の搬送は暑さのため難しく、親族の到着を待って二十日通夜、二十一日に密葬を営み京都の煙となられた。私はどうしても都合がつかず、妙光寺のご縁で庭の修復を見ていただいた滋賀県の住職が読経、親族に加え若いお弟子さんたち、京都市内の造園関係者らがお見送りした。京都は先生が二十代のころ現場の修行をされた思い出の地でもあった。

改めて九月十日、川崎市の善正寺を会場に本葬を営んだ。ここの住職は私の後輩でもあり、毎年夏のフェスティバル安穏には先生を車で乗せてきてくれる関係で、先生もこの寺に若い造園家を集めて私塾を開いておられた。

本葬は、私が導師になってご縁のある住職ばかり六人でお勤めさせていただいた。葬儀委員長は前東京農大学長で現造園学科長の進士先生。三百人近い会葬者で狭い境内は溢れ、皆が心から別れを惜しむ涙にくれた、感慨深い葬儀だったように思う。後日「野澤さんらしい心のこもった本当にいい葬儀だった、との声を沢山いただいた」と弟さんから知らされた。この葬儀を裏方ですべてを取り仕切ったのが、妙光寺でご縁を結んだ葬儀社の業界誌編集長の碑文谷さんと、造園連合会の事務局だった。

実は先生のお姉さん夫妻も子供が無く、早くから「安穏廟」を申し込まれていた。先ごろそのご夫婦があいついで亡くなり、埋葬されたばかり。このお姉さんがお茶の先生だったことから、その道具一式を妙光寺に寄贈いただき、さらに遺産の一部で茶室の改修工事を、先生の監修でやっていただいた。この秋に茶室開きと法事を併せてやろうと、先生始め関係者一同で楽しみにしていたのに、先生の四十九日忌法要と納骨までもが加わってしまった。どう進めたらいいのか、親族も私も気が抜けてしまい、話がまとまらないのが今の状況だ。

これまでの私の住職三十年と苦楽を共にして、いまある妙光寺を作っていただいた。その間あるときは父のように、あるときは兄のように、またあるときは友達のように本当に親しくさせていただいた。先生のそのご恩とご功績に心から感謝し、ご冥福をお祈り申し上げる。南無妙法蓮華経。

寺の動き

お盆法要他

・夏の行事

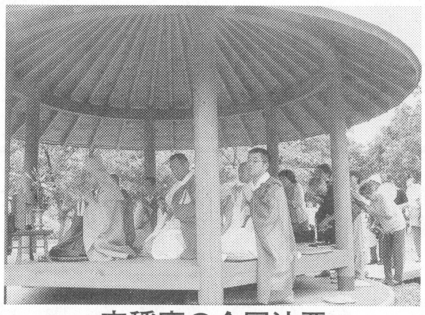
八月一日のお盆お墓参りと施餓鬼法要が、珍しく雨降りになりました。それでも九時過ぎには天気も回復し、人出も増えたので法要開始を三十分遅らせて、お墓でのお経に対応しました。安穏廟での合同法要、本堂での施餓鬼法要にも多数お参りいただき、ご苦労様でした。塔婆供養にも沢山の申し込みがあり、全てを読み上げるのに時間がかかりました。ところが「よくあれだけ声が続きますね」と意外な感心をされる方が多く驚きました。



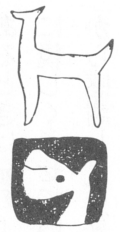
8月1日　賑わうお墓参り

これを土曜か日曜にしてはどうかというご意見が以前があり、引き続き思案中です。ところが新潟祭りが来年から第一土日になるそうで、ますます動かしにくくなりました。もう少し検討する時間をください。

お盆に全ての檀信徒宅に伺いました。地元では研修生を同行して、一緒に読経しましたが、皆さんから「頑張りなさいね」と励ましの言葉をいただき、とても喜んでいました。ありがとうございました。



安穏廟の合同法要



八月十九日、例年の岩屋七面宮祭礼を行いました。猛暑で誰もお参りに来ないのではないかと心配しましたが、少ないながらもいつもの方が顔を見せてくださり、大汗をかきながら皆さんでお参りしました。

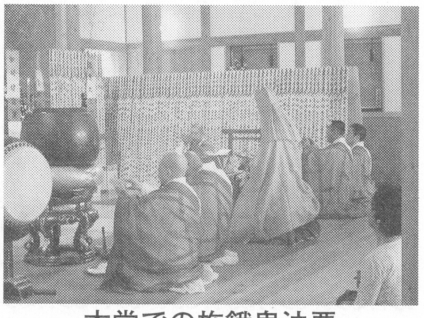
フェスティバル安穏は別ページでご報告します。

・台所改修工事完成

ご協力いただきました台所の改修工事がおかげさまで完成し、七月二十日から使用しています。ちょうど研修生が入った日と同じで人数が増え、調理に後片付



法要でお参りする人々



本堂での施餓鬼法要

けにと、大変助かっています。夏の猛暑で冷房をいれればよかったかな、と一時思いましたが、開口部分も広がり扇風機でしのぎました。

前号でご案内したので「完成した台所を見たい」と大勢の方が見えました。行事のときは調理中でお応えできなかった方もあります。ご了承願います。

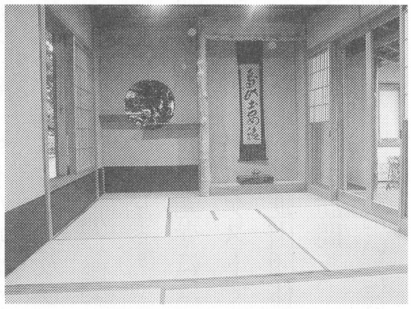
・「杜の安穏」増設工事

「安穏廟はまだ残っていますか」と言う声を時々聞きます。「杜の安穏」の増設工事が七月に完成したので、もう百区画弱あります。秋に入り問い合わせが続き、また八月三十一日付「毎日新聞」全国版掲載、九月十九日NHKテレビ「生活ほっとモーニング」で全国紹介（予定）、ですので、さらに申し込みが続くと思われます。

・「茶室改修」

野澤先生追悼文でご紹介しましたが、弟さんである野澤耕さんの音頭とりで、お姉さんの田代さんご夫妻の遺産の一部で茶室を改修奉納していただきました。

この茶室は昭和二十九年、総理大臣就任前の石橋湛山氏が来られた際、休憩用の離れとして建てたそうです。本格的な茶室ではありませんが、茶席が開かれるように今回改修したものです。どなたでもお使いいただけますので、お問い合わせください。


修復された茶室

・年会費お忘れなく

前号で年会費を八月末までとご案内を差し上げましたが、まだ未納の方がおいでです。お忘れの方は振替用紙を探して郵便局からご送金ください。振替用紙が不明の方は、郵便局で青い振替用紙を入手し、「妙光寺檀信徒会」００６５０―３―１９２３９　と記入のうえご送金ください。この場合送金手数料がかかります。

・イベント多彩

同封別紙のイベントを予定しています。陶芸家の中野亘さんは住職の友人で妙光寺では二回目の個展です。前回は沢山の人から、期間中二回三回とおいでいただきました。日常的に使える器や飾ってもいい器など、親しみの持てるものです。

コンサートはすっかりお馴染みになった、佐渡は『鼓童』の中心メンバー山口幹文さんと、『花結』小島千恵子さん。他に特別出演も予定しています。院庭での夜の光のなか、幻想的な雰囲気をお楽しみいただけます。屋外ですから寒さも予想されますので、はおるものをご用意ください。ご予約は電話で妙光寺まで。

大道芸フェスティバルは、地域の母親が子供たちに音楽や劇に触れる機会を持ちたいと活動する「巻親子劇場」が主催です。この事務局長が安穏会員で、フェスティバルにもスタッフとして活躍してくださいました。子供から大人まで、十分に楽しめる出し物が盛りだくさんです。

どちらもどなたでも参加いただけます。お誘いあわせお出かけください。

お会式と授戒会

お会式（おえしき）

日蓮聖人のご命日（十月十三日）の法要を〝お会式〟といいます。弘安五年（一二八二）にご入滅されましたので、今年は七二五回忌となります。

妙光寺は日蓮聖人が佐渡に島流しの途中、嵐のために角田浜に立ち寄られたご縁で建てられました。日蓮聖人滅後二十一年目のことで、以来六九三年を経ていまにあります。歴史に思いをはせ、日蓮聖人を偲ぶ法要にぜひおでかけください。

先代住職三十三回忌法要

妙光寺の先代住職、浄妙院日陽上人は昭和四十九年二月二日に六十六歳で亡くなりました。今年が三十三回忌にあたりますので、お会式に併せて法要を営みます。ご焼香いただければありがたく、ご案内申し上げます。

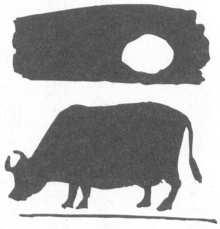
記念講演

いま日本で一番元気のいいお坊さん、松本市神宮寺の高橋卓志住職をお迎えし、たっぷりお話いただきます。住職を務めながらお寺で永六輔さんを校長に「浅間尋常小学校」を開催し、地域の高齢者向けデイサービス「極楽クラブ」を運営、その他ラジオのパーソナリティー、東京大学講師、県内のＮＰＯ法人をまとめるＮＰＯの事務局長、タイのエイズ患者を支援する活動など海外にまで及びます。「住職は十職だ、住職は飛び職だ」と世界で多岐に渡る活動を語ります。

小川住職と親交も長く、妙光寺には五年前のフェスティバル安穏にゲストでお迎えしました。その翌年、身延山団体参拝の帰路に四十人で神宮寺を訪問し、わずかな時間でしたがお話いただいたら、バスガイドさんまで涙を流して聞き入り「なぜもっとゆっくり時間を取らなかった」と、皆さんから言われたほどです。宗派は臨済宗ですが、「僕の寺は皆の宗、臨機応変派です」。さらに「僕のお経は早い、安い、旨い」と大変ユーモラスで親しみやすいお人柄です。

またチェルノブイリ原発事故ではいち早く現地に入り、その後何度も通って被害者救済に尽力。そのとき同行の医師が今ＮＨＫラジオ等で大活躍の鎌田實諏訪中央病院名誉院長で、鎌田医師とは終末期医療を病院で実践したりしてこられた仲間です。

大変貴重な機会です。ぜひご参加ください。



お会式（おえしき）

十月二十九日（日曜）

午前十一時　日蓮聖人第七二五回忌法要
併せて　妙光寺第五十二世　浄妙院日陽上人　第三十三回忌法要
第五回授戒会

昼十二時　お斉

午後一時　記念講演　松本市神宮寺　高橋卓志　住職

参加費用　お一人　三千円（他にお気持ちで野菜、米、お酒、お明し等々、あるいはそれをお金で「〇〇料」として、お持ち下さる方、歓迎です）

参加申込　準備の都合上　十月二十日までに地区世話人か、妙光寺まで。費用は当日受付でお願いします。
送迎バスの用意はありません。

生前戒名を授けます

本来は仏様の弟子となった証として生前にお付けするのが戒名で、日蓮宗では法号といいます。世間では戒名料といってお金で買うがごとくに言われていますが、妙光寺ではこれまでもこれからも経費以外は無料です。
ただし檀徒であることが条件です。安穏会員でも跡継ぎの有無に関係なく申し込みは可能ですが、その後は檀徒（年会費一万円）になっていただきます。

- 十月二十九日（日）午前九時集合。お会式に出席いただき、午後三時ころ終了。
- 特別な服装は不要ですが、法事に参列するような感じでどうぞ。
- 式の前に日蓮宗の基本について研修していただきます。
- 費用として三万円を、当日納めてください。戒名とお名前を刺繍した略式袈裟と数珠を記念に差し上げます。
- 戒名にはお名前の一文字かご希望の文字を入れます。
- お申し込みは九月末日まで。既にお申し込みの方には詳しい案内書と申込書をお送りしました。
- 体調が悪くてお寺に行けないという方は、ご相談ください。

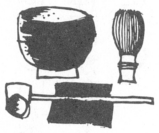
研修生日誌

研修を振り返って

矢部智之

自分には御前様がまだ何も見えていません。ただ壇信徒の方にとても信頼されていることだけはひしひしと感じることができました。「御前様、御前様！・・・」というやわらかく心を許した口調をこの一ヶ月半の間、何度耳にしたことかわかりません。

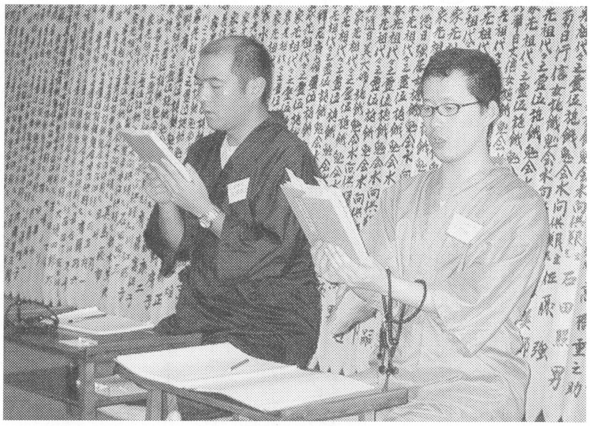
私はまだ朝のお勤めの御前様しか見えていません。私は私なりの声で人に安らぎを覚えて頂くようなお経がいつか読めればいいなぁと強く思っております。ただお経は人に安らぎを与えるひとつの手段と感じています。大切なことは人を思いやることだと感じます。些細な事ですが、受付に来られた方が妙光寺に来ると安心するという気持ちを持って頂くようなあいさつや応対をまず心がけていきます。



また私は御前様と壇信徒の方のお話を少しでも理解できるよう極力、御前様と同じ空気を吸っていきたいと思います。そこで自分が感じた事は御前様に伝えてみようと思います。

なぜなら今、私が必要なことは本来の自分を妙光寺の方々へぶつけてみることだと感じているからです。前職で一〇〇人以上在籍している部署で働いていましたのでどうしても個性的な意見を出すと潰されてしまう、そんな雰囲気がありました。妙光寺で私の個性の扉が開いた今、私に必要なことはその個性を表に出すことだと感じています。なぜなら妙光寺が私の人柄を買ってくれたからです。

最後に研修期間を改めて振り返ると、あっという間で妙光寺の年間行事で一番忙しい時期は共感できましたが、まだまだ体力勝負的なところしか自分なりに見えていない気がします。その中でも俯瞰的に見るということは学ぶことができました。残りの一ヶ月半は今までに学んだひとつひとつの意味合いをよく理解し、点を線で結べるように心がけ、実行に移していきます。



お経の練習

大野雄一郎

研修も半分が過ぎ、最初の十日程は、慣れないせいか、何ヶ月もお寺にいる様な感じがしたが、それを過ぎたら、一気に半分迄きてしまった。長い様で短い、そんな感じだ。

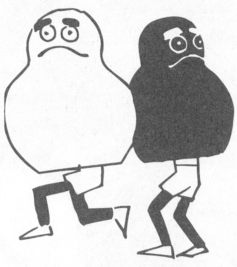
ただ、新しい環境の中で色々な事を覚えていかなければならない事から、考える時間が減り、自分の気持ち、内面の変化を確かめる事が多少減った気もする。ただ、その分仕事を覚えてきたという事なのだろう。

一ヵ月半お寺で過ごすと、自分のこの仕事に於ける、向き、不向き、得手、不得手が見え、研修中に行う幅広い業務に触れる事が、将来、その人材の適材適所を見極める重要な期間になっているのだと、改めて思う。

研修を振り返り思う事は、表面的な業務より、研修制度というシステムや、お寺が今後やろうとしている事、檀家さんの他者を受け入れる、開かれた雰囲気や、斬新な発想は、この地域が新しい物や他者を受け入れてきた場所だったから、といった話など、日々の業務より目に見えない部分に興味が湧いた。勿論、日々の作業に関しても全てが新鮮で、ひとつひとつの作業を繰り返し、体で覚えていった一ヵ月半だった。

研修も半分が過ぎ、日々の仕事の中、こうしたら円滑に仕事が進むのではと思う部分もある。それは、ノートにまとめ、絵にして記録してきた事を清書し、ファイルにまとめて、マニュアルを作りたいと思う。それが出来れば今後の仕事も進め易くなり、また次の人達が入ってくるなら、その人達もそれを見れば、どこをどうする、どこに何がある、どこに何を置く、といった事が簡単にわかる様になればいいと思う。そういった内から出てくる気持ちに敏感に的確に答えていきたい。

これらが、一ヶ月半の研修を振り返って、私が今思う事です。



フェスティバル安穏の報告


受付風景

第十七回目となるフェスティバル安穏を八月二十六日（土）に開きました。例年は雨の心配をするのですが、今年は暑すぎることが懸念されました。幸い湿度が低く、風が爽やかで日陰では心地よいほどで、院庭に張った日除けテントの下、ゆったりと講演を聞くことができました。


喫茶コーナー


住職の語り

小川住職の語りは急逝された野澤先生についてお知らせし、妙光寺の今後をお伝えしました。その後「仏教は爆発だ」と題して、臨済宗僧侶でもあり広島大学

大学院教授の町田宗鳳先生が、仏教の悟りについてやさしく解説され、分かりやすかったと好評でした。

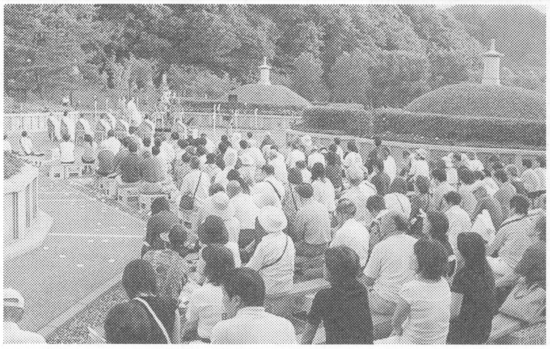
第二部の安穏法会は皆さんによる安穏廟前での合同供養祭。式衆に日蓮宗僧侶十名と、声明に真言宗豊山派四名が出座。参列の皆さんも散華で供養に参加し、夕暮れの緑の広場に五色の花びらが風に舞いました。事前の打ち合わせが不十分で、せっかくの声明と十分かみあわなかったことが反省されました。


町田先生の講演に聴き入る参加者



町田先生を囲んでのパネルトーク


法要会場に向かう出座の僧侶


法要風景

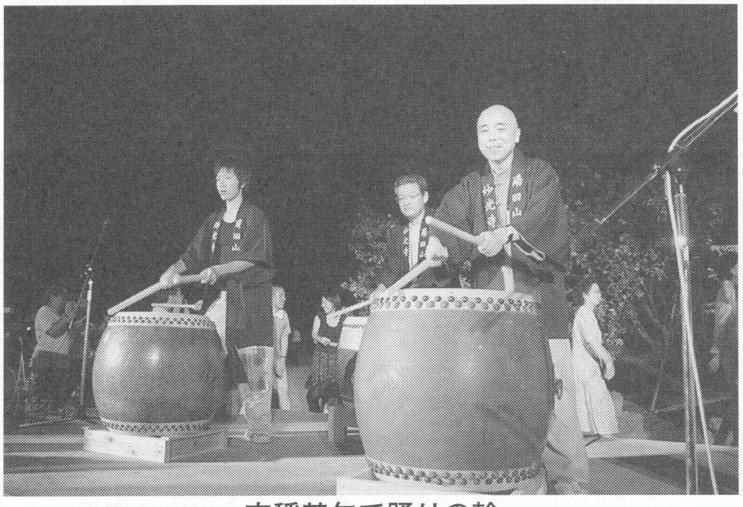

法要中の式衆

第三部の交流パーティーは昨年から外庭に広々と会場を設営。日中の暑さを忘れるひんやりした風の中で、名物の「なす漬け」等に舌鼓を打ちながら会話に話が弾みました。後半、地元のハーモニカの天才少年と言われる高校生のなっちゃんの演奏には、百八十人の参加者一同大興奮。バックのフォークソングバンドに合わせて一緒に歌うなど、盛り上がりました。しめは恒例の「安穏甚句」。太鼓と笛をバックに妙光寺出入りの大工の棟梁の歌で、皆さんの踊りの輪が幾重にもできました。「一人で参加しても初対面でも境遇の近い方が多くて話が弾むのが嬉しいから、毎年来るのが楽しみです」と言う声

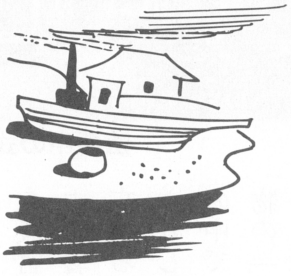

交流パーティー

が印象的でした。

今年は会員スタッフが中心になって企画、設営の準備を行い、内容も会員と檀信徒向けにして、外部向けにしない方針できました。その結果参加者もそのようになり、人数が昨年より三割程減った二七〇人あまりに留まりました。それはそれでいいのですが、その分パーティーを含めた参加費が減収で、一方ゲストや声明の費用、印刷代金等が増加した分、妙光寺会計からの持ち出しが増えてしまいました。次回以降、内容と経費のバランスについて議論の余地があります。会員、檀信徒の参加がもっと増えてくれるのが一番いいので、内容についてももっと検討します。とくに「夏の長時間に野外での行事参加は高齢者にとって身体的に負担が大きい」との意見があり、これも大きな課題です。


安穏甚句で踊りの輪

一方で、今年は関東、関西の大学の女子大学院生が六人、研究をかねて当日スタッフとして手伝ってくれました。来年も参加したいとの感想で、若返りはありがたいことです。安穏会員、檀信徒の方で今後スタッフとしてお手伝いいただける方を、引き続き募集しています。



寺庭から

「野澤先生へ」

小川 なぎさ



「これはえのきですな。」白い髭をたくわえた仙人が教えてくださった。裏の神社の雑木の中に枝ぶりの大きな木があり、私はその木が大好きで毎日ほれぼれと眺めていたのですが、名前がわからず今度野澤先生聞いてみようとずっと思っていたのでした。七月の初夏の気持ちの良い日、故野澤清先生、弟ご夫妻とお昼ご飯をいただいた帰り道のことでした。

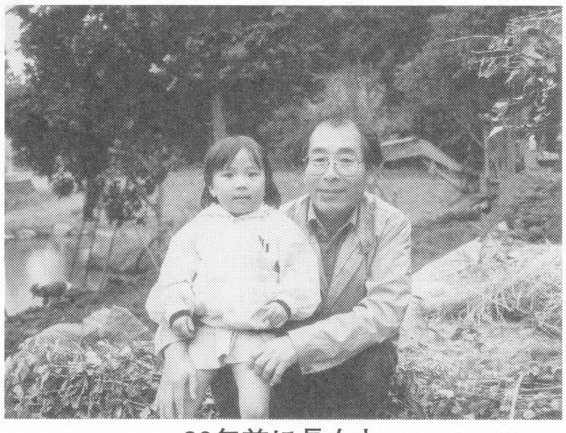
その一ヵ月後先生の訃報が届きました。

以前「私はこれから仙人になります。」と言うから、ずっとこの世にいて下さるのだと思っていました。残念でなりません。

今では想像することが難しいような荒れ果てた境内を粘り強くこつこつと、二十年もの年月をかけてこんなにも気持ちの良い庭を創って下さり、安穏廟を設計して妙光寺の財政難を解消することにも手助けしてくださいました。先日思い出してビデオを見たのですが、山門前の池の工事を始めたとき、自ら長靴をはき、一本の枝をもち作業をする若い先生が写っていました。まだよちよち歩きの幼い娘たちに優しく語りかけて下さっているその姿に涙がこぼれます。

まだ若い私のつたない手料理を黙って召し上がりお酒を飲み、たくさんのお話を伺いながら、私は大人になることの素晴らしさのようなものを知りました。穏やかさ、公平さ、思慮深さ、どんな質問にもきちんと答えてくださる大人の余裕のようなもの。仙人宣言をする前から、私にとっては仙人のように尊敬する方でした。

ある時「なぎささんは年寄りがすきですな。」と言われたので笑ってごまかしてしまいましたが、「いいえ、野澤先生を好きなのです。」と照れずに言えばよかった。先生のご冥福を心からお祈りいたします。そしてありがとうございました。



20年前に長女と

行事案内

大宝寺　災害復興支援のお願い



お盆の八月十二日朝、同じ日蓮宗で県内聖籠町にある大宝寺様が落雷による火災で全焼されました。ご住職夫妻は外の掃除中で難を逃れ、負傷者のないことが不幸中の幸いといえます。神田ご住職はお寺に「困りごと相談所」を開設され、広く一般に家庭内の問題で悩む方の相談に乗るなど、社会活動家としても知られています。

火災保険もあまり十分でなかったそうでその復興に頭を抱えており、妙光寺の所属する「日蓮宗新潟県東部衆務所」では対策本部を設け、全寺院（五十カ寺）で支援することにしました。つきましては檀信徒の方々に趣意書を同封させていただきましたので、一口千円を目安にご協力いただければ幸いです。十二月末を締め切りとしますので。それまでにお参りされる際、また暮れのお経に伺った際、郵送等々ご都合のよい方法でお願いいたします。

あとがき



行事続きの八月のところにさらに葬儀が重なり、また野澤先生訃報の対応に追われ、ずっと休めない状態が続きました。暑さも厳しく、また研修生との生活も気の抜けない日々で、九月始めに一時夫婦で体調を壊しました。ご連絡しなければいけない方にも延び延びになって、気持ちはあせるばかり。かような事情で、とうとうこの号はお彼岸に間に合わないうえ、変則的な構成で申し訳ありません。

いまはどうにか体調も復活しつつあり、お彼岸を迎えます。この秋にはまた行事も続きます。ご案内が遅くなって申し訳ありませんが、ぜひお出かけください。

ここのところ悲しいお知らせが続いたように思いますが、次号ではあっと驚く、嬉しいニュースをお伝えします。このお話を戴いたつい先日、私自身も耳を疑う驚きでした。次回に詳しいご報告をしますので、ご期待ください。（小川）

